

『ピッブ』の話 (ヂッケンス) (一)

|| 英文學に現はれたる子供(二十六) ||

岡田みつ

僕は苗字がピリップ、名がフヒリップと云ふのであるが、廻らぬ子供の舌で兩方を合せてピツブとよりは言へなかつたので、とう／＼ピツブといふ名で通つてしまつた。

僕は父も母も見つた事がない、その寫眞さへも見つた事がないので、二人の墓石から想像してこんな人でもあつたらうかと思つて居た。父の墓に彫り付けてある文字の形からして、父は四角張つた、<sup>ふとろし</sup>肥肉の色黒の人で、縮れた黒髪であつたらうと思ひ、母は病身で「そばかす」のある婦人だつたらうと思つた。兩親の墓の傍に並んで居る五個の小さい墓は、皆僕の兄弟達のであつた。

僕の田舎は、河の近くの沼地で、海からは二十哩位しか隔たつて居なかつた。僕が周圍の事物を

明瞭<sup>はつきり</sup>と心に印象したのは、忘れもせぬ或るいやに冷たい夕方近くの事であつた。此<sup>いかにも</sup>蕁麻の生ひ茂つて居る、そら淋しい處は墓場で、自分の父も母も兄弟もこゝに埋まつてゐて、それから墓場の向ふの暗い平らな原は沼澤で、そのまた先の鉛色の低い線が河で、風の吹いて來るあの遠くの物凄<sup>おそろ</sup>しい處が海で、かうやつて身を慄<sup>おそ</sup>はせて恐がつて、而してしく／＼泣いてゐるのは、ピツブ即僕自身である<sup>と</sup>と自覺した。

「靜かにしろ！」と御寺の入口の横手にある墓石の間から男が一人跳り出て來て、怒鳴つた。「靜にしろ。この野郎 さもないと殺してしまふぞ。」見るから恐ろしい男であつた。兎末な鼠色の着物で、足部<sup>あし</sup>に太い鎖が付いて、頭は帽子がなくて

唯古巾が巻き付けてあり、足には破れ靴が簞つてゐた。水に浸り、泥に塗れ、小石に躓き、尖り石に擦り剝かれ、蕁麻に刺され、茨に突かれたと見え、其男は跛引きく身體を慄はせ、怖ろしい顔をして睨視み付けた。僕の顎の邊を引掴みながらも、彼は寒いか、齒の根をガタ／＼いさせて居た。

「殺しちゃいやです。何卒それだけは止して下さい。」と僕は怖くて、ひたすら頼んだ。

「何といふ名だ。早くいへ。」と男は言った。

「ビツブ」

「え。も一度。はつきり言へ。」と睨めながら男は言った。

「ビツブ、ビツブといふのです。」

「家は何處だ！方角を指して見ろ。」

僕は此の御寺から一哩そこら離れてゐる僕の村の方を指した。其男は暫時僕を熟と視てゐたが、急に僕を逆まにぶら下げて、衣囊の中を空虚にした。衣囊には無一物で、唯バンの鉄片があつた。

御寺がやつとあたり前に真直に見えたと思つたら、もう其男は、餓鬼のやうにそのパンを噛つてゐた、僕はブル／＼慄へながら、丈の高い墓石の上に坐らされてゐた。

「オイ、小童奴。貴様は丸々した頬をしてゐるな。」と唇を甜めづりながらその男が言った。

其頃僕は年よりも身長が少なくて、身體も強壯では無かつたのであるが、頬はまる／＼して居たと思ふ。

「本氣になりや、噛り取つてやれない事もない。」と今にも實行しさうに首を振り／＼その男が言った。

僕はどうか止してくれと一生懸命に頼んで、腰を掛けさせられてゐる墓石に、しつかりと掴まつてゐた。

「こら、よく聞け。貴様の母親は何處にゐる。」  
「彼處に。」

男は愕然として小走りに走り退いて、一寸立停

まつて、肩越しに見かへつた。

「あすこです。あれが僕の母さんです。」と僕は恐る／＼説明した。

「あゝさうか。それに並んでゐるのが貴様の親父か。」

と男は戻つて来て問ふた。

「えい。あれがさうです。」

「フーン」と考へ込んで、「では誰と一所にゐるんだ。假りに己が貴様を生かして置いてやるとしてだな。まだ生かして置くか如何だかはつきり決心しないのだが」

「僕の姉さんです。ジョーガージュレーツといふ鍛冶屋の妻君です。」

「鍛冶屋か」といつて彼は自分の足を眺めた。

自分の足と僕とを交互に視て、やがて彼は僕の傍へ寄つて来て、兩手で抱き上げながら、精一杯仰げに向けた。であるから、彼の眼がまともに僕を見下ろすと、僕は厭でもその男の眼を見なければならぬやうな工合であつた。

「さ、よく聞け。貴様の命に關する事だぞ。鑢

ツてもものを知つてゐるだろう。」

「はい。」

「食ひものツてもものも知つてゐるだろう。」

「はい。」

一句言つては、彼は僕を仰向けにして、僕を尙更途方に暮れさせた。「鑢をもつて来い。」と言つて一つグツと僕を反らせ、「食物を持つて来いよ。」と言つて、亦一反り兩方とも持つて来いよ。」といつて亦一反り、「さもないと内臓を引抜くぞ」と言つて亦反りさせた。

僕は恐ろしさは恐ろしいし、目がまはつて仕方がないので、兩手で彼に縋り付いて、

「僕を真直にさへして下されば、心持がよくなつて、もつとちやんとあなたの言ふ事を心に止めて聞かれます。」といつた。

彼は、こんどは思ひきり烈しく僕を反らせたの

で、御寺が翻筋斗うんはぶりをするやうに見えた。其からその男は僕を双手に抱へて、墓石の上に坐らせて、恐い文句を並べた。

「貴様、明朝早くその鑢やすりと食物とをおれの處へ持つて來るのだ。向ふに見える古砲臺へ其を持つて來るんだ。貴様がその通りにして、而して人に向つて、おれと逢つたといふ事を、言葉では勿論、様子にでも出さなければ、生かして置いてやるが、さもなくて、今言つたものを持つて來ないか、それとも今言つた事に一寸でも違つた事をすれば、貴様の内臓を刳り出して、炙やいて食つてしまふぞ。貴様は、己れを一人ぼつちと思ふかも知れないが、そうではない。もう一人若い男が己と一所に居るんで、其奴そいつに比べれば、己なんぞは佛様見たやうだ。その男は、己が今言つてゐる言葉を聞いてゐるぞ。而してそれは貴様のやうな子供を捕へて、心臓しんぞうだの肝臓かんぞうだのを引出す秘術を心得てゐるんだ。其奴な

ら逃げやうたつて、とても逃げられない。寢室の戸に錠を下して床に入つて、夜着を引被ぶつて、而して、もう、これで大丈夫だと思つてゐても、その人はそいつと入つて來て、腹を割いてしまふ。己れは今大骨折りで、其奴が貴様を困らせないやうにしてゐるのだ。其奴が貴様の内臓に觸らぬやうにと氣を採んでゐるんだ。さ、どうだ。」

僕は鑢も持つて來ませう、食物も手に入るだけ少量ながら持つて來ませう、而して明朝早くその砲臺で渡しませうと言つた。

「もし其に背けば、天罰忽たちちに降つて死にますと言ひなさい。」と男が云つた。

僕はその通りに言つたので、男はやう／＼僕を下ろして呉れた。

「さあ、貴様は請合つて事をよく覺えてゐる。あの若い男の事もよく覺えて居る。さ早く行け。」

「さ……さやうなら。御休みなさい。」と僕は吃りく挨拶をした。

男は平らな湿つばい原を見渡して、

「御休みなさいか！蛙かそれとも鰻でもあれ  
ばさ。」と言ひく身を窄めて、御寺の低い塀の  
方へ跛引きく歩み去つた。

僕がその後を見送つて立停つた時は、原は唯長い黒い横線に見えた。河も亦一條の横線をなしてゐたが、原のほどに黒く太くはなかつた。空にも、長い真紅の線と、真黒の線とが入り交りに幾條も並んでゐた。見渡す限りの中に、真直に立つてゐるものは唯二つあつてそれが微かに黒く輪廓だけを示して居た。其一つは燈明臺でも一つは、絞殺臺であつた。今の男は、この絞殺臺の方へ跛引きく行くので、僕は、以前此處で殺されたといふ海賊が、蘇生して、臺から下りて、今又其處へ戻つて行くのではないかと思つた。さう思つたら、急に怖氣を催して來た。僕は彼の後を默然と見送

つてゐる牛の群がやつぱりそんな事を思つて居るかしらむと想像しながら、あの怖ろしい若い方の男は、どこに居るのだらうと見廻したが、其らしいものも居なかつた。兎に角、恐くてたまらないので、一目散に家へ走せ歸つた。

\* \* \* \* \*

僕の姉さん即ジョー、ガージェエリーの妻になつてゐるのは、僕よりも二十何歳も年長で、僕を「手で育てたといふので、自分も得意なら近所でも評判であつた。僕は其れが如何いふ意味だかと獨り考へて、姉さんの手は硬い手であるし、その手をよく僕にも又自分の夫にも加へるから、其れで大方僕と義兄さんとは、「手で育てられた」といふのだらうと思つて居た。

姉さんは姿色は良くなかつた。義兄さんは色が白くて、滑くの顔で、ごく呑氣な、御人よしの惡氣のない人であつた。姉さんは、黒目、黒髪であんまり顔や何か赤いから、僕はよく姉さんは石

鎧よろしを使はないで、鏢器せうしで皮膚はだを擦磨すりみがくのではないかと思つた。姉さんは丈が高く骨つぼくて、大方年中前掛がけで、而して胸の處にピンや縫針を一抔挿さした四角な胸當をしてゐた。さういふ身形みなりでゐるのを大變な功績てがらのやうに心得て、夫が能力はたらきがないから、かうやつてゐると面當つらめかしく言ふのが癖であつた。

義兄の鍛冶工場は、住宅に接してゐた。僕が墓場から驅け戻つて來た時には、工場は、もう閉しまつてゐて、義兄のジョーは臺所に獨りで居た。ジョーと僕とは同じ境遇に惱んでゐるといふ譯で、御互に心の中まで打明けて語りあふので、今日も僕が戸を明け、一寸顔を差し入れると、すぐにジョーは、

「姉さんがさつきから幾度も〜御前を尋ねてゐるせ。今も亦出て行つた處だ。」といつた。

「さうかい」

「さうだよ。御まけに「厄介物」を持つて出た

せ。」

この物恐ろしい報告を聞いて、僕は胸衣ちよこに残つてゐる唯一つのボタンをひねくり廻して、落膽おちだんして火を見詰めた。「厄介物」といふのは一本の杖で、あんまりそれで度々打擲うちされるので、もう先が滑すべくくになつて居るのであつた。

「立たつたり居ゐたり立たつたり居ゐたりしてな、とう／＼厄介物を引摺ひんで暴れ出ていつた。暴れ出たのだよ」と言ひながら、ジョーは火箸で爐格子の隙間から火を突き崩して「ね、ピンブ、姉さんは狂くるひ出たんだよ。」

「もう先刻さうかい」と僕はジョーを形かたの大きい子供だとしか思はないので、同輩の待遇をいつもするるのであつた。ジョーは時計を見上げながら、

「さうさな、暴れ出てから五分程になるな。オイ、歸つて來た！戸の蔭へかくれろ、小僧よ。」僕は、その忠告を容れた。姉は戸を明けやうと

して、何か支へるものがあるので、すぐ其と推し

て「厄介物」を押し込んで小突き廻した。僕は、困つて、ジョーに飛び付くと、ジョーはいつでも僕を抱くのが好きなので、早速に僕を受け取つて火の前にかくまつて、自分の大きな脚を伸して、僕を囲み込んでしまった。

「今まで何處にいつて居た、猿めー」と、姉は足を踏み鳴らしながら怒鳴つた。「何處にいつて居たか、さつさと言ひなさい。人をよい加減心配させて！ 早くいへ。さもないとその隅から引摺り出すから。」

「墓場にいつて居たばかりです。」と僕は立上つてめそ／＼と泣きながら答へた。

「墓場だつて！ 私といふものが居なかつたら御前は疾くに墓場へ行つてしまつて居るのだよ。誰が御前を育てたのだい」

「姉さん。」

「ほんとにさ、何故御前見たやうなものを育てたか身らないのかい。」

「僕は知らない！」と僕はべそをかいた。

「私にも分らないよ。もう之からかういふ事は決してしない。眞實に御前が生れてからといふもの、私やこの前掛を外した事がないといつても宜いのだ。鍛冶屋なんかの家内になるだけでも、澤山だのに、御前の親にまでなつてやるンぢやないか。」

僕は不平顔して火を熟視しながら、心は他處へ奔つて居た。沼地に鎖を足に付けてゐる落人氣味のわるい若者、鑊、食物、この家で竊盜をしようと誓つたあの約定……が燃えてゐる火の中にあり／＼と見えた。

「ふん、墓場か、呆れるね。」と厄介物を元の處へ納めて姉はいつた。「御前達二人とも墓場なんて無造作に言ふがい。やがて御前達の御蔭で、私が墓場にまいられるやうになるンだらう。さうしたら、さぞまあ二人残されて慘な事だらうよ。」

姉は夕食の膳拵に取掛つた。ジョーは自分の脚部を眺めて、今言はれたやうな事件が起つたら、僕と二人でどんな様になるかと想像をしてゐる風であつたが、暫くあつて妻のする事を黙つて目で追掛けてゐた。妻の御機嫌のわるい時は、いつもジョーはかういふ態度をとるのであつた。

姉さんのパンの切り方といつたら、いつも變はつた事がなくチャンと定まつて居た。先、左の手にパンの一塊を堅く握つて、胸當に押し付ける。其れ故時々針がパンに刺さつてゐて僕等の口へ入る事もある。其から、ナイフにバターを付けて、藥劑師が膏藥を伸ばすやうに、パンの上に擴げて行くのだが、ペター〜と巧みにナイフの両面を使つて硬皮の縁邊りを撫でたり格好を整へたりして、最後にキユツ〜とパンの端でナイフを拭いて、其からごく厚く一片を鋸引きにしながら、もうやがて二つに切り離れるといふ前に、其れを更に二片に分けて、二つをジョーに、一つを僕に呉れるの

である。

此日は、僕は御腹が減つてゐたが、其パンを食べる勇氣はなかつた。あの怖ろしい知己と、もつと怖ろしいその友達とに、何か取つて置いてやらなくはならぬと考へた。姉さんは、吝嗇で家内の取締りが嚴重であるから、戸棚の中に好都合のものなどが無いでもないので、僕は、股引の中へパンを納めて置うと決心した。

さと、その決心を續けて行くのに、大變の努力を要した。僕は家根の頂邊から飛び降りるか、水の深みへ飛び込む時程の心組であるのに、何も知らないジョーが、更に事を面倒にさせた。前にも言つたやうに二人は同病者である上に、無邪氣な友達關係があるので、ジョーと僕とは、每晚パンを噛りながら、時々食べ掛けを互に見せ合つては又食べ續ける例になつてゐた。此夜も、ジョーは幾度か自分のパンを見せひらかして、食べつこの競争に入れ〜と促したが、その度に、ジョーは



僕が茶呑茶碗を一方の膝に置いて、手も付けぬパンをもう一方の膝の上に置いてゐるのを見た。終に、僕は、定めた事を決行しなくてはならぬと思つて、それにはなるべく今の場合に適應した方法でするが上策と考へ、ジョーが一寸他處見をしてゐる間に、僕は自分のパンを股引の下へ押し込んだ。

ジョーは、僕が食慾がないのだと思つたらしく案じ顔をして、噛みとる一口くも美味くないというた、口の中に長く置いて、考へく噛んでは藥か何かのやうにグツと呑み下してゐた。彼は、もう一口食べやうとして、小首を傾け、其拍子に僕の方を見たところが、僕のパンは無くなつて居た。

ジョーが、食べ割るのも忘れて、呆れ迷ふて、僕を見守つてゐる様子が尋常ならぬので、忽ち姉さんの目に停つた。

「どうしたのさと。」、彼女は、茶碗を下に置

いて、鋭く言つた。

「オイく」とジョーは眞面目に僕を諫めて「ピツプや、身體に障るよ。何處かで支へるぞ噛みはしないだろう、え。」

「どうしたのだつていへばさ。」と姉さんは、一層鋭く繰り返した。

「少しでもいゝから咳き出せるなら、出した方が宜いせ。行儀は悪いかもしれないが、身體は大事なもの。」とジョーはひた呆れに呆れて言つてゐる。

姉さんは、自暴になつて、ジョーに掴み掛かり、その兩頬の鬚を掴んで、後部の壁にその頭をコック打付けた。僕は隅の方で「濟まないな」と思つて、眺めてゐた。

「さあ、どういふ譯だか言つて御覽。この阿呆め。」と姉は、息を切らせながら言つた。

ジョーは、途方に暮れて妻を眺め、困つたといふ風にパンを食べ割つて、また僕を見た。

「ビツブ」やと、ジョーは、嚴かにいつた。

最後の一口を頬張つて、室内には彼と僕と二人切であるやうに、信實の籠もつた聲で——「御前と己とは仲良しだろう。だから、御前の事を告げ口なんかする筈はないがね。でも」と言つて、椅子を動かし、二人の間の床板ゆかを眺めまはしてまた僕を見て、「あんな丸呑みは……」

「パンを丸呑みにしたのかへ。此子は！」と、姉は叫んだ

「あのな、小僧」とジョーは、やつぱりパンを頬張つて、妻を見ないで、僕を見て「己も御前位の時分は丸呑みをしたよ。——随分幾度も——其に子供仲間で丸呑みをする奴も大勢見たがな御前のやうな丸呑みをするものを見た事が無い。まあ、よくそのまゝ死んでしまはなかつたよ。」

姉は、僕に跳り掛かつて、髪の毛で引摺り上げて、「さあ来て薬を飲め！」と言つた限り、何も言

はなかつた。

どこかの厭な醫者めが、其頃タール液を良薬だと言ひ初めたので、宅うちの姉さんは、押入に始終それを多量に貯へてゐた。その味の嫌いやなだけに効力きりもあるといふわけで——通常の折でさへ、この薬は興奮劑だとして、時々飲ませられるその度に、僕は自分が塗り立ての塀のやうな臭氣がすると思つた。此夜は事情が事情故この薬を三合位飲まなくてはいけないとあつて、姉は僕の頭を抱へて、無理／＼に其れだけを咽喉へ流し込んだ。而して、ジョーまでが一合半御相伴をさせられた。——今夜は氣分がどうかしてゐるといはれて。僕の腹工商合から判断すると、ジョーは飲む前は兎に角、飲んだあとこそ氣分が悪かつた事と察せられた。

大人でも、小兒でも、良心の呵責といふものは恐ろしいものである。殊に、小兒が、股引の中の内所の重荷と、心の中の内所の重荷と兩方背負つてゐるとなつたら、まるで重い刑罰を受けてゐる

と同様である。姉さんの所有物を盗むのだといふ罪深い考へと、坐つてゐても、臺所で小仕事を言付けられても股引のパンの處へ手を當て、居る必要とが一所になつて僕は氣が狂ひさうであつた。

沼から風が吹いて來て爐の火が赤くなると、それに連れて、あの足に鎖を付けた怖い男が、戸外に來て居て、「もう待つて居られない。只の今食べ物をくれ。」と言つて居るやうに聞こえた。又、もしか、あの怖い若者が、性來の短氣が押へ難くなるか、時日を間違へるからして明日でなく今晚自分の心臓と肝とを取らうと定めたら、どうしやう、と思つたりした。人が、恐くて身の毛が彌立つといふが、僕のはこの時確にさうなつたに違ひない。それとも他人ひとにはこんな事がないか知らむ！

丁度クリスマスの前夜の事で、僕は七時から八時變で銅製の棒で、明日の菓御子をかき混ぜさせられた。僕は、足部の重荷が、身體を動かすたび

に、踵の邊へ出て來さうで、どうも困つたが、良い鹽梅にそつと抜け出して、其たけは、屋根裏の僕の寢間へ秘めて來る事が出來た。

「おや！」と僕はかき混ぜを濟せて、寢かされる前に一寸火の前で暖まつてゐた時に、叫んだ「今のは鐵砲の音、兄さん？」

「さゝ。又囚人がやつたな。」

「如何いふ譯なの。」と僕は尋ねた。

姉さんは、説明となると、必らず自分が引取つてしまふので、慳貪に、

「逃げたのさ。逃げたのさ。」と言つた。

姉さんが縫ものをして、屈がんでゐるのを幸ひ「囚人て何？」と口で言葉の格好を拵らへて、ジョーに問ふた。ジョーも、口をひどく動かして、むづかしい返答をして呉れるらしかつたが、「ビツプ」といふだけしか解らなかつた。